

1-2-6b人間

「人間」の第2弾は、「自由」と「平等」を取り上げます。

かなり重いテーマで、一部の大学しか出題されませんが、出されたときは真正面から問われるテーマなので、手加減しないで論じます。

④「自由」であること

i) 自由とは

どこかのお店にランチを食べに行つて、メニューを見ると、料理が1種類しかなかったとします。

もちろん、君はそれを頼むしかない。

それを「自由」だと思いませんか？

では、2種類なら？ 3種類なら？

種類が増えると、その分自由度が増す感じです。

自由とは選択肢があつて、自分で選べることでしょう。

ii) 自由からの逃走

しかし、もし料理の種類が100も200もあつたら？

何頼んでいいか、わからなくなります。

で、思わず、店員に「お勧めは？」と聞いてしまうかもしれません。

選択肢が多すぎると、私たちは選べなくなって、自分から選ぶ権利を放棄してしまうようです。

これを「自由からの逃走」といいます。

iii) 枠組みの必要性

選択肢が少なくても自由でないし、選択肢が多すぎても自由を手放してしまう。

自由が自由であるためには、適度な「枠組み」が要るわけです。

たしかに、、、

何でも好きなことを作文しなさい。と言われると困りますが、
最近楽しかったことを作文しなさい。と言われると書きやすいですね。

「自由」を論じられるとき、必ずのように「枠組み」論になります。

しかし、、、

みんなが納得するような「枠組み」——なかなか難しそうです。

⑤差別

i) 《される》側の論理

過激なことを言うようですが、
「差別」は決してありません。

というのは、差別が、まず第一に《される》側の意識の問題だからです。

《する》側に差別するつもりがなくても、《される》側が差別だと感じれば、そこに「差別」は存在します。

ii) 《する》側の論理

では、なぜそのようなことが起こるのでしょうか。

《される》側の思い過ごし？ 自意識過剰？ そもそも精神的に病んでる？

もちろん、その可能性もあります。

がそれ以上に、《する》側のその行為がその社会では当たり前すぎて、《される》側が傷つく可能性に気づけないからです。

たとえば、妻を「嫁」と呼ぶのが男性による女性差別だとわかりますか。

夫を「主人」と呼ぶのが女性自身による女性差別だと気づきますか。

デートの時男性が女性におごるのを普通だと思っているとしたら、それは女性差別であり、さらに男性差別でもあること、わかっていますか。

それがわからないところに「差別」は生まれます。

いや深刻なのは、そうした差別的発言や行為を男性だけがやっているのではなく、女性もまたそれを受け入れ、やっているというところです。

ジェンダーギャップ指数というのをご存知ですか。

世界経済フォーラムが毎年発表する男女格差のランキングですが、
23年日本は、146カ国中125位でした。

本当に日本ってそんなに男女差別ひどいの？ と思った人。

それがたとえ外から見てひどく差別的であったとしても、その中で暮らしている者にとって、日本の男女のあり方は普通で当たり前なものにすぎません。

実際には、そうしたあり方にモヤモヤしている女性も男性もかなり多いはずです。

少なくとも、私は、妻を「嫁」扱いする男を見るとムカムカします。

夫を「主人」と呼ぶ女性に対して「かわいそうだな」と思います。

が、それはほとんどの場合、モヤモヤやムカムカのままで終わるでしょう。

いや、終わらせるでしょう。

君たちも、「嫁」や「主人」という言い方のどこがおかしいの？ と思っている人いませんか。

そうわからない人はわからないんですよ。

自分が差別していることが。

だから、言ってもしかたない。

と飲み込むのが、常識人としての生き方です。

そう考えると、17年アメリカでの「#Me Too運動」、19年日本での「#Ku Too運動」は女性たちの勇気ある行動であり、数少ない成功例だといえます。

モヤモヤをモヤモヤのままにせず、社会的に排斥されることを恐れずに、差別を言語化し、社会に認めさせたのですから。

iii) 社会的な構造

ただ、問題を矮小化してはなりません。

こうした差別は、特定の個人やグループの問題ではなく、それを容認してきた社会全体の問題です。

社会的に当たり前のことだと思われているからこそ、そこに現にある差別的行為や状況が認められない。

というか、当たり前だと思っているからこそ、人々はそうした差別を助長してしまう。

差別は社会的な構造の問題であり、それによって傷つく《される》側の意識の問題なのです。

だから、決してなくなることはありません。

むしろ、差別がなくならないことを認めることが、差別を減らす第一歩といえます。

《される》側の意識が嗅ぎ取ったモヤモヤは、その社会の当たり前である以上、簡単に改変できることではないかもしれません。

が、もし私たちがより平等な社会をめざすなら、《される》側が感じたモヤモヤに《する》側として敏感になることは、社会全体にとって決して損なことではないはずです。

「いじめ」や「ハラスメント」は「差別」の一種です。

だから、決してなくなりません。

その理由、わかりました？

⑥平等の意味、自由の意味

i) 自由と平等？

人間は主体です。

私たち一人一人が等しく主体である、と考えられています。

これを「**平等**」といいます。

だからこそ、その一人一人が自分で考え行動してもよい、と考えるのが「**自由**」です。

でも、よく考えてみると、何か変です。

みんな同じだ、と言っておきながら、みんな違っていいよ、というのですから。

「自由と平等」とよくいいますが、簡単に並べていいことではなさそうです。

自由を優先すると平等が犠牲になり、平等を優先すると自由が犠牲になる。

自由の国といわれるアメリカで格差や差別がなくならないのは、ある意味、しかたないことなのかもしれません。

ii) 理念としての自由／平等

所詮、自由も平等も理念にすぎません。

そうあってほしいという人類の願いといってもいいでしょう。

人間すべてを主体と見なすことで、すべての人間が「同じ」になります。

この出発点がまず問題です。

身体的な優劣も頭脳的な優劣も、遺伝的に、生まれる前から多くの部分が決まっています。

生まれた後の社会的な環境、露骨にいうと、親がお金を持っているかどうか、で子供の生活も将来もまったく違います。

それを、人間としては「同じ」だ、という奇麗事でごまかしても、現実は変わりません。

親ガチャ——はつきりあります。

人間は決して平等ではないのです。

ということは、人間は「同じように自由」ではありません。

戦争状態の国に暮らしている人たちが、君たちと「同じ」だと思いますか。

「同じように自由」ですか。

こうした話は、他国の問題ではありません。

「相対的貧困率」って知っていますか¹。

相対的貧困とは、その国の生活水準からすると貧しい状態のことです。

22年の統計では、日本は15%を越え、先進国で最悪です。

ひとり親家庭では50%を越えているというから驚きです。

そうした家庭の子供たちが、たとえば、君たちと同じ条件で大学受験できると思いますか。

¹<https://www.asahi.com/sdgs/article/14844785>

もちろん、生活保護や奨学金など、現在の社会が無策なわけではありません。
が、だから、受験機会は平等だ、大学選びは自由だ、といえるでしょうか。

ここで、社会の現状を批判しようとしているわけではありません。

自由や平等をただの理念に終わらさないためにも、現在、世界中で、その意味が問い直されていることを知っておきましょう。